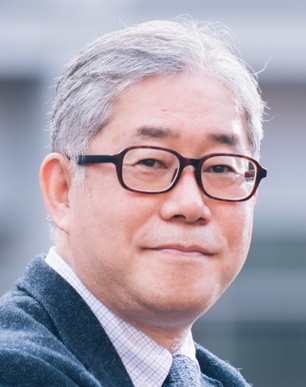
①　

②　「すべては政治だが、政治はすべてではない」という言葉があります。日常生活で生じるちょっとしたことも、政治の産物といえば産物です。家族や男女の関係にも「政治性」が見て取れることは、改めていうまでもありません。しかし、だからといって、「政治の論理が私たちの生活すべてを貫いて何が悪い」と開き直ると、世界は地獄になります。そのことを人類は、前世紀に思い知らされたはずです。

ともすれば独走しがちな政治との適切な「距離感」を、私たちは身につける必要があるようです。ところで、「すべて」であることを標榜する営みは政治以外にもあって、その最たるものが宗教です。特に欧米で強い影響力を持ったのは、「この世で無縁な領域は１平方センチたりともない」と主張するような神を奉ずるそれでした。

したがって、かの地での宗教と政治は、ヒリヒリするような関係を先鋭化させます。お互い、反発し合いながらも、相手の魅力（魔力？）を誰よりもよく知っている。そうした両者がどう向き合ってきたのか、また、どう向き合っていくことになるのか。おもにヨーロッパやアメリカの事例をもとにこの問題に取り組んでいるのが、私たちの研究会です。そして、「すべて」をめぐってせめぎ合う政治と宗教の実態を理解することは、人間生活の中で政治が占めるべき地位の同定に資するはずだ。そう私は考えています。

･･････小難しい話になってしまいました。ごめんなさい。照れ隠しも兼ねて、ゼミをめぐる雑感をひとつ記しておきます。

当たり前の話ですが、多くの人にとって大学は、「先生」と呼ばれる人と接する最後の場となります。社会に出ると、「先輩」や「後輩」そして「友人」や「上司」「部下」はいても、先生はもういません。

もっとも、こう述べたからといって私は、「だから先生を有り難く思え」と説教したいわけでは断じてありません。しかし、使用教室からしても、学生と教師の距離が短くならざるを得ないのがゼミという場です。ですので皆さんには、せっかくの機会ですから、好き嫌いの対象でも、得になるならないの対象でも、ひょっとすると尊敬するしないの対象でもない（しかも、多分に面倒くさい）、大人たちとも協働するスキルを身につけてもらいたい。あなたが働くことになる社会とは、多分にそうした人びとから成り立っていますから。そして、大学内でこういうスキルを培う場を提供できるのは、通常、ゼミだけです。　【998文字】

③　特に政教関係を意識しつつ、欧米世界における政治思想史を研究対象にしています。

④　３年生１４名

　　４年生１６名（うち経済学部生１名）

⑤　可

⑥　原則として可です。事前に田上とメールで相談してください。

⑦　課題の本を一文一文読みくだし、「この人は何を言いたいのだろう」「それについて私はどう思っているのだろう」「それはどんな理屈に基づくのだろう」と言語化して自問自答する時間は、ゼミ生だけが得られる貴重な財産だと思います。また、その自分なりの考えを発表する場では、教授やゼミの仲間が、同じ答えのない問題に挑戦する立場から、1人で考えていては得られないような知見を与えてくれます。

⑧　毎週水曜日の４・５時限が授業時間です（サブゼミ等なし）。2021年度は、教室が「密」にならないように工夫して、対面授業を行いました。3・4年生合同の授業を基本としています（時間割では、4時限が3年生、5時限が4年生となっていますが）。

特に春学期は、3年生にトレーニングを積んでもらう時期として位置づけられています。2021年度を例にすると、「アメリカとキリスト教」という年間テーマのもとに、1～2週に1冊のペースで（ゼミ生全員が読破する）講読する共通文献が指定されました。そして、当番にあたった3年生には、共通文献についての（3000字程度の）レポートが課されます。授業当日はそのレポートを発表してもらったうえで、そこでの評価すべき点や更なる考察を促したい点などが、他のゼミ生や教員から指摘されることになります。当番は、隔週で回ってくると考えてください。

秋学期になると、3年生は三田祭論文の作成に、4年生は卒業論文の作成に、力を注ぐことになります。また、コロナ禍に見舞われる以前は、毎年9月に二泊三日の合宿を行っていました。

⑨　2021年度春学期、共通文献として講読したのは以下の通りです。山我哲雄著『キリスト教入門』（岩波ジュニア新書）、森本あんり著『キリスト教でたどるアメリカ史』（角川文庫）、橋爪大三郎・大澤真幸著『アメリカ』（河出新書）、Ａ.トクヴィル著『アメリカにおけるデモクラシーについて』（中公クラシックス）、S.R. ペイス著『はじめてのニーバー兄弟』（教文館）、山下壮起著『ヒップホップ・レザレクション』（新教出版社）、ラインホールド・ニーバー著『ソーシャルワークを支える宗教の視点』（聖学院大学出版会）等

⑩　https://keiolaw.org/seminar/tanoue\_masanaru

⑪　tanouezemi2021@gmail.com